

令和 6 年 5 月 26 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00504

研究課題名（和文）シュルレアリスムの国際化における日本の事例ー脱エクゾチスムの解明ー

研究課題名（英文）The Internationalization of Surrealism: how exoticism was removed from Japanese Surrealism

研究代表者

永井 敦子（Nagai, Atsuko）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：50217949

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる成果は、下の二点に集約できる。一点目は1920年代後半から40年代前半のシュルレアリスムに影響を受けた詩人の詩及び詩論を網羅的に分析し、それらを日本の近現代詩史に位置づけた上で、彼らのシュルレアリスム受容の特性が、理論重視、参照元の複数性、中央集権的でない活動形態などにあり、その独立的で相対的な姿勢が、欧米の紋切り型の日本イメージからの脱却をも促した点。

二点目は日仏の研究者の協力を得ながら、この時期の日本のシュルレアリスム的な美術・文学作品とその分析を、雑誌の特集号や詩の翻訳アンソロジーの出版、講演を通じてフランスで紹介し、その作品群の多様性や現代性を実証できた点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は下の二点に集約できる。一点目はシュルレアリスムの第二次世界大戦前の受容の例としては西脇順三郎、瀧口修造、北園克衛、左川ちからの作品に関心が集中しがちななかで、他にも多様な文学史的・美学的価値の高い作品があることを実証的に示し、特に春山行夫や上田敏雄の詩と詩論の重要性を示した点。

二点目は、同時期の日本のモダニズム詩の紹介がこの40年余り停滞しているなか、日仏の専門家の協力も得つつ同時期のシュルレアリスム的な詩や美術を紹介する雑誌の特集号を編纂、さらに翻訳アンソロジーの出版や講演会開催によって詩作品の紹介と分析をフランス語で紹介し、国際的な文化理解の一端を担ったこと。

研究成果の概要（英文）： One aim of the following research was to analyze the poetry and poetics of Japanese poets influenced by Surrealism from the late 1920s to the early 1940s, and place them in the history of modern Japanese poetry. To do this the author examined the characteristics of the reception of Surrealism by Japanese artists and poets, especially their emphasis on theory; the plurality of their reference sources; the non-centralized form of their output; and the independent and fluid attitudes that encouraged Japanese artists and poets to break away from the stereotypical image of Japan in western arts.

The second aim of this research was to introduce some examples of Japanese surrealist art and literary works from this period, and present french analysis of these works through magazine special issues, the publication of poetry translation anthologies, and lectures; thus demonstrating the diversity and modernity of this body of work.

研究分野：20世紀フランス文学

キーワード：モダニズム シュルレアリスム 近現代詩 第二次世界大戦 詩論

1. 研究開始当初の背景

1930年代のフランスのシュルレアリスム運動は、芸術家の移住や亡命のみならず、共産党との関係強化の影響もあってその「国際化」の傾向を強め、各国の芸術家との連携もはかられた。それによりシュルレアリスムの精神や方法も、世界の各地域の社会・文化状況のなかで固有の展開を遂げるようになった。

1920年代後半から1940年代前半、受容の初期段階にあった日本においても、シュルレアリスムの影響を受けた多様かつ文学史的・美学的価値の高い詩が多く生まれた。しかしながら研究者の関心は、西脇順三郎、瀧口修造、北脇克衛といった一部の芸術家の作品にほぼ集中的に向けられる状況が長く続いていた。海外への紹介についても、同様の状況であった。

しかしながら特に20世紀末からは、地域間の文化交流への関心の高まりや、地域ごとの芸術的創造行為を世界的な視野で捉えようとする研究動向の影響もあり、上で述べたようなシュルレアリスム受容の各国事例への関心も高まっていた。申請者は第二次世界大戦前後のフランスのシュルレアリスム運動を主たる研究対象としてきたため、海外のシュルレアリスム研究者の日本の事例への関心の高まりと、彼らが入手できる日本のシュルレアリスムに関する情報の欠落とのギャップを強く感じるようになった。そこで日本のシュルレアリスム受容について本格的に研究し、その成果を、フランスをはじめとした海外へ紹介することの意味や必要性を認識するようになった。またそうした各国事例の調査によって、フランスのシュルレアリスム運動の社会的、文化史的位置づけも、より明確になりうると予想した。

2. 研究の目的

そこで本研究ではシュルレアリスムの「国際化」の一事例として、第二次世界大戦以前の日本における受容を取り上げ、当該作家の作品やその成立背景の分析、さらにフランスに滞在した当時の日本の芸術家による現地の芸術家たちとの交流や、日仏のシュルレアリストの書簡や郵送による交流の実態を実証的にたどる調査・研究を行い、その成果を日仏の両方で発表することとした。

また、本研究の準備段階として行った該当作品の分析を通じて浮き彫りになった日本のシュルレアリスム受容のいくつかの特徴のうちでも、特にそれが欧米のエグゾチスムへの自己同化を免れていた点に注目し、その要因を解明することをめざした。

そして最終的には、日本のシュルレアリスム受容の特徴と、その歴史的、社会的・文化的要因を解明し、それを日本の近現代詩の歴史と、世界的な文化交渉の歴史に位置づけることをめざした。

3. 研究の方法

主たる資料としては、シュルレアリスムの影響を受けた詩人たちの、1920年代半ばから1940年代半ばに発表された詩集のほか、『詩と詩論』や『セルパン』、『新領土』をはじめとする当時の詩誌や文芸誌、総合文化誌に掲載された詩論や対談などを分析対象としたほか、小松清、岡本太郎など、当時フランスに滞在した芸術家や評論家の、シュルレアリストをはじめとする作家たちとの交流を跡づける一次資料を調査、閲覧し、その実態を分析した。特に研究期間の前半にコロナ禍の影響を受けたため、海外調査を研究計画策定当初の予定通りに行うことはできなかったものの、国内で入手・閲覧可能な文献を活用することで、本研究に一定の成果を生むことはできた。

またシュルレアリスムの影響を受けた詩人たちが1940年代半ばまでに発表した作品の、日本の近現代詩史における位置づけを明確にするために、明治時代以降の近現代詩、特に大正時代の象徴詩との関係性や、フランス詩からの影響の受け方の相違について分析した。また左川ちか、江間照子、永瀬清子などの女性詩人については、作品分析のほか、彼女たちの同人としてのあり方を分析するために、詩誌における彼女たちの活動実態や、当時彼女たちの作品に与えられていた評価などを収集・分析した。また第二次世界大戦後から今日までに、彼女たちに与えられてきた評価をたどった。

4. 研究成果

シュルレアリスムの影響を受けた第二次世界大戦前の詩人たちは、欧米のエグゾチスムへの自己同化、すなわち受容対象が受容者に求めるようなイメージに自己を押し込めたり、そのイメ

ージに合わせて自己演出するようなところがなかったことについては、1930年代に日本のシュルレアリストとの交流を求めて接触をはかったフランスのシュルレアリストが、そうした予見のない態度での相互交流を求めたことが大きな要因と言える。しかし同時に、日本のシュレアリストたちのなかの、文学創造における理論志向や、普遍性と地方性とのバランスを取ることを意識した活動姿勢といったさまざまな存在様態が、相手側の持つ文化理解の構図に自らを押し込めない、自由で柔軟な態度を醸成していたことを示すことができた。特に小松清が示したような、「行動主義」を紐帯としたシュルレアリスムとアンドレ・マルローとの共通性の認識や、春山行夫が強調した、「知性主義」を紐帯としたシュルレアリスムとポール・ヴァレリーとの共通性の認識など、当時のフランスでは受け止められづらい発想が日本のシュルレアリスムから生まれている点は、欧米の紋切り型のエグゾチスムに対して彼らが取った距離とも無関係ではないだろう。さらに詳細をつめる必要があるが、こうした点を明らかにし、日本語やフランス語の論文のなかで示すことができたのが、本研究の主たる成果である。

また日本のシュルレアリスムに関する分析や作品紹介をフランス語で行うことについては、20名の詩人の合計200余りの詩をフランス語に訳し、年譜や概説とともに掲載したアンソロジーをマルティヌ・モントー（美術史博士、元フランス国立図書館司書）の協力の下で編集・出版し、その紹介をかねた講演会を3回開催し、フランスの研究者や詩人と議論できたこと、またこの出版を機に、カナダやアメリカのシュルレアリスム研究者からの問い合わせや来訪があり、シュルレアリスムを通じた議論ができたことも、収穫であった。

さらにこの研究の作業過程を通じて、組織に属さずに、特定の詩人についての資料収集や分析、全集の出版に長期間精力的に携わっておられる研究者の方々や、美術史の分野で日本のシュルレアリスムについての研究や特定の芸術家についての資料収集や保存、分析を継続されている学芸員の方とも議論をさせていただけるようになったことは、今後の研究活動にとっても貴重な収穫であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永井敦子	4. 巻 42
2. 論文標題 日本のモダニズム詩と女性詩人ー左川ちかと江間章子の作品とその評価を中心にー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Les lettres francaises	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井敦子	4. 巻 41号
2. 論文標題 春山夫の「詩」と「詩論」ー象徴主義詩改革の方向性ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Les lettres francaises（上智大学フランス語フランス文学会）	6. 最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsuko Nagai, Martine Monteau coordination	4. 巻 9
2. 論文標題 Echanges avec le Japon 共同編集及び4件の論文のフランス語訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 A litterature - Action	6. 最初と最後の頁 5-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 速水豊・弘中智子・清水智世・永井敦子・副田一穂・林田龍太・菊屋吉生・呉孟晋・大谷省吾	4. 発行年 2024年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 304
3. 書名 『シュルレアリスムと日本』このうち「何が「日本の」シュルレアリスムか」	

1. 著者名 森川もなみ、大谷省吾、永井敦子、黒沢義輝、呉景欣	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山梨県立美術館	5. 総ページ数 208
3. 書名 『米倉壽仁展』内「米倉壽仁の詩を読むー『透明ナ歳月』を中心にー」13-16頁	

1. 著者名 Atsuko Nagai, avec la collaboration de Martine Monteau	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Mars-A	5. 総ページ数 163
3. 書名 Un jour ce silence renversera la table Anthologie de la poesie surrealiste japonaise 1925-1945	

1. 著者名 永井敦子・畑亜弥子・吉澤英樹・吉村和明 共編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上智大学出版	5. 総ページ数 427
3. 書名 アンドレ・マルローと現代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>以下の日程、開催地で、研究成果[図書]の3番目に示した1920年代から1940年代の日本のシュルレアリスム詩翻訳アンソロジー掲載の詩の分析を中心とする講演会を開催した。</p> <p>2023.03.16.Librairie JUNKU, Paris, France.</p> <p>2023.03.17.Librairie Page et plumes, Limoges, France.</p> <p>2023.03.18.Centre culturel Maison Andre Breton,La Rose Impossible, Saint-Cirq La Popie, France.</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	Bibliotheque Nationale de France	Maison Andre Breton	Universite d'Angers	
フランス	Universite de Nantes	Universite de Paris Sorbonne		
フランス	Bibliotheque Nationale de France	Universite de Nantes		